

むかし、あるところに、おじいさんが住んでいました。おじいさんは、いつも、町へ行くたびに、欠けたすり鉢を買って、頭にかぶって帰りました。村の人が、

「そんな欠けたすり鉢を何にするんだ」ときくと、おじいさんは、

「ああこれか。これは風呂場の屋根にふくんだ」といいました。

ある晩、おじいさんは、天からお金が雨のようにふって来るゆめを見ました。

つぎの朝、おじいさんは、木を植えようと、庭を掘っていました。すると、つぼがひとつ埋まっているのを見つけました。何だろうと思ってふたを取ると、中に大判小判がいっぱい入っていました。おじいさんは、

「わしは昨夜、天からお金がふるゆめは見たけれども、これは土の中から出たお金だ。わしにさずかったものじゃあない」といって、また元のように、つぼにふたをして埋めておきました。

となりのおじいさんが、このようすを見ていました。そして、

「あのじいさん、ひとりごとをいいながら、何を埋めていたんだ」と思って、そつとおじいさんの庭に入って来ました。おじいさんがうめ直したところを掘ってみると、つぼがありました。

「ああ、これだ、これだ。あのじいさん、こんな所につぼをかくしているぞ」

となりのおじいさんは、そういって、つぼのふたを取りました。すると、中に、大きなへびが、うようよ入っていました。となりのおじいさんは、腹を立てて、つぼを持って、おじいさんの家の屋根に上りました。そして、天窓から、

「そりゃ。これ見ろ」といって、つぼのへびを投げ落としました。

下では、おじいさんが、晩ご飯を食べていました。見上げると、天窓から、大判小判がぴかぴか光りながらふって来ました。おじいさんは、

「ああ、これだ、これだ。昨夜見たゆめのおりだ。これは天からふってきたお金だから、わしにさずかったもんだ」といって、よろこびましたとさ。

原話：『聴耳草紙』佐々木喜善

再話：村上郁